

# MÉLI-MÉLO

## 07

朝吹 亮二	「密室論（縫） いあわす冬の雨」……………	2
日 敬介	「イロハンゴ空港から」……………	6
鈴木 雅雄	「幽閉者たち （2） ラスネールあるいは創造行為としてのギロチン」…	13
唐竹 勘平	「たとえば夜空のティー・トレイ（2）」……………	27
むらちちはる	「禿山の一夜」……………	63
椎名 亮輔	「ポストモダンの社会と音楽」……………	68
稲賀 繁美	「ヨーロッパとアラビアの学際交流」……………	73
港 千尋	「革命曲線 II」……………	81
菅 啓次郎	「A letter」……………	94
寺西 潔	「CUPOLA フルートとピアノのために」……………	99
知念 明子	「微分伝説（3） 誰かが私を愛してる？」……………	99

# ヨーロッパとアラビアの学際交流

マルタ島の第二回ユーロ・アラブ大学に招かれて

稲賀繁美

世の中に困ったもの数ある中にも、国際学会と称するものほどの規模の大きいにつけは迷惑なものもないかと思われる。国際学会くらい周囲の環境と切り離された自閉的パック旅行は他にないというのに、どだい学者業などに没入する教授様方は大人物ほど籠かごにはめられるのをお嫌いのところにもってきて、開催地に少しでも不如意が出来れば、すぐにも文句たらたらという温室育ちの不平分子である。組織者に対しては完璧な大名旅行を要求しつつも各人はおよそそんな押着せが大嫌いとあつては、こんな客をまじめにもてなそうとする組織者こそよい面の皮というものだ。

地中海の要石、マルタ島でひらかれたユーロ・アラブ大学という学会は、いわば学者のヴァカンスと研究活動の抱き合わせという矛盾の止揚がいかなる大混乱を惹起するか的好実験場となった。早い話、地中海の観光汚染を憂うるをもって自らの使命と心得る人たちが、当の観光地で卒先わがもの顔の観光客としてふるまえば、どれだけ醜悪なあまのじゃくぶりを発揮するかは、像想に難くあるまい。こうした唯我独尊につける葉はただひとつ。自由放任あるのみである。まこと本年で二回目のこの夏季移動大学は、どこまで手抜きをしても国際学会というものが成立し得るかを測定する上でも、ま

たない試金石となった。もともと制御不能な参加者に誠意を込めた対応など、するだけヤボというものである。かくして会期中、参加者たちは、顔をあわず度にインシヤラーを挨拶に、明日のことは気にかけず、というより、この先の運命も知らばこそ、あせらず、あわてず、あきらめず、あてにせず、かくして何ひとつあなたまかせとは参らぬ、まるで生存競争のような学会が開幕した。だがこれこそ異文化理解と相互認識の原点ではなかったらうか。

まずバリのオルリー空港出発説とロワシー空港出発説の入り乱れるなかで、とにかく出発当日その場で何とか航空券を手に入れたのは良いとして、さて日程が不明、発表者が不明、時間割りが不明、いやその前に、マルタの空港からバラバラに小型バスに乗せられて予約名簿とは無関係に押し込まれたホテルが一体島のどこいらに位置しているのか、そこから会場にどうして行ったものか、そもそもその会場がどこにある何と称する建物なのか、見当もつかねば問い合わせる術もない。これは面白くなってきた。

という次第で翌朝、日本にあれば博物館行きまちがいないニッサン(?)のオンボロバスに四十分も揺られて大遅刻の末たどり着いた会場で定刻通り議事のはじまっている気遣いもない。開会は二時

間遅れ、さてようやく午前の部も終りという時分にはホテルの昼食時間も終りで食堂のボーイはそわそわしているし、そうこうしているうちに送迎バスは客は一人も乗せずに出発してしまい(モトへ、後にきくと若干一名乗客があったよ)である、皆、他に交通機関も不如意とあってしばし途方に暮れているうちに日も暮れる。計画は立たぬ先から続々とご破算になるから、毎日がこれ冒険、戦い終って日が暮れて、はじめてその日一日の日程がおぼろげにわかってくるという頼りなさ。これぞ今を生きる実感というべきだが、発表でスライド上映ともなれば二日前から、マイク、机上ランプ、幻燈、延長コードから技師がしまで全て発表者自らホテルの管理人と交渉している間に、事務局にコピーを頼んでおいた聴衆用のプリントは紛失し、通訳用のテキストも戻ってこないし、もしテキストの予備を作っておかなければ発表当日冷や汗をかくところだった。

こんな大混乱の中でも組織者の Muhamed Aiziz 氏は平然とたまえ笑顔を絶やさず、いささか動ずるところもない。大した器である。混乱の原因の一半は、つい二週間前のマルタの政権交替ともなう官僚組織の首のすげ換えと方針変更で、当初の見込み通りの協力を受け入れ側から得られなくなった為だとも仄聞したが、アジザ氏はそんな不満はおくびにも漏らさない。別に死人が出るわけでもなし、参加者はいえ、もとよりマルタに滞在費をおんぶしてもらった夏のヴァカンス兼用客なのだから、予定が狂えばそれだけ余暇も増える算段で、頭に血をのぼせていきり立つだけ大人気ないというものだろう。社会主義圏と自由主義圏、イスラームとカトリック、西欧とアラブ、アフリカとヨーロッパという対立項の要となるマルタの特殊な政治地理的状况を実感としてつかむには、むしろこの混

でもあった。苛酷な生活に律されたアラビア語の複雑な規律を統べ尽した上で一篇の詩が出来れば、それは羊を屠って祝うに値する、大いなる業であった。詩は魂の加護なくては到達し得ぬ境涯であるが、かと言って、靈感は天から無償で落ちて来るものではない。あくまで苦心刻身のちに詩人の努力はついに天啓にむくわれる。あたかも沙漠の慈悲としての夜こそが正午の輝きを約束するように。

\*

三日目、七月十五日は、ヨーロッパとアラブの文化交流に話題がしばられた。まずは、バルセロナ大学の大観学 J. Verret 教授の、天文学知識の伝播に関する詳細な文献学的研究。つづいてベルベル出身の Moatassime 氏による、マグレブでのアラビア語教育が加えられる諸問題に関する報告。さらにアルジェリア出身の精神科医 Dr. Bennagadi 博士による、フランスへのマグレブ移民の精神疾患に関する考察。

モアタッシム氏の話は教育行政担当者としての職業的使命が、社会学統計調査の科学的基礎に干渉するイデオロギーとならざるを得ぬジレンマを見せつけた。子供の保護育成とか国語とかいった概念が既に国家次元の政治的価値観を前提としており、その立場からなされた調査は、むしろ村落のかかえる現実的社会問題を隠蔽せずにはいない。現実に旧フランス領マグレブ三国でフランス語とアラビア語を同時に子供たちに習得させることが教育技術の見地からして不可能であるという以前に、アルジェリアがとりわけ力を入れるアラビア語化は、そもそもこの言語が北アフリカにおいてはフランス語におとらず人工的かつ理念上の共通言語でしかないことを暴露している。また植民地支配の道具であったフランス語は、社会的

乱ぶりに身を浸すことこそ肝要なだから。

\*

小生の招かれたのは、四週間にわたる学会の中の第一週目、「思想、知、社会行動様式の交差点」と題するセッションである。つづく週には文学・芸術、国際関係等が予定されていた(はずだがこれも詳ししない)。のべの発表者は百二十人に達するとのことであるが、実際には全員が一堂に会することはなく、各週の参加者数は四十人強、むしろ討論には理想的な人数である。とは言え『タイムズ』七月十四日付の記事を見ると、いかにも大集会との印象を与える写真が載っており、少々苦笑を禁じ得ない。そう、大切なのは学者さんよりも何よりマスコミ対策なのである。

共和国大統領のお言葉を給った(つまり開会式だけの)第一日につき第二日目、七月十四日の文化交流研究と称するワークショップが小生にあてがわれた。マルタ島を訪れた最後の幕府使節、徳川昭武の話や枕に、絵画におけるオリエンタリズムと極東日本のオクシデンタリズムとの相互誤解を介した芸術創造の弁証法を、一篇の物語にして説き語り、地中海世界の東西・南北交渉の裏に広がる広大な文化的背景を示唆して、幸いにもこの会期中一番毛色の変わった発表との珍評を得た。

同じ分科会では、レバノンの憂国詩人 Sayegh 氏が、魂を揺がさずにはいない見事なアラビア語の暗唱を交えた講演で掉尾を飾った。イスラームによって詩文が聖典に回収されてしまう以前の遊牧アラブの詩魂の原初形態を、その沙漠での生活様式と不二なる家々天幕としての詩の理念のうちに求めようとするその主張は、アラブだがイスラームではない一詩人の勇敢な自己証明と歴史意識の開示

栄達のみならず出かせぎにも不可欠な道具としての機能を依然果しているのみならず、それが現に学校教育の限界を越える大きな影響力を発揮していることは、フランス語吹き換えの『ダラス』がテレビで放映されると、礼拝の時間より街行く人影が少なくなる、という現実ひとつとっても否定しようのない事実なのである。

マグレブにおいてアラビア語とフランス語とは、例えば言えばちぐはぐの左右の靴のようなもので、ちぐはぐでどちらも中途半端だからといって、片方を脱ぎ捨てるわけにもゆかない。こうした文化複合の煮つまったところに出現するのが移民の精神病理である。愛するものは手放すほかに、必要なものは憎悪の対象たる他ない、という移民労働者を取り囲む特有の環境は既に今から三十年前、アルベール・メンミの『植民者と被植民者の肖像』に描かれた図式を基本的には今日もなお脱してはいない。さらにマグレブのフランス移民の場合、ホルトガル移民とは異って、そもそも出身国に根ざすアイデンティティ意識が希薄であり、例えば *immigre d'origine algerienne* ないしフランス在住の *Muslim* という意識が先行する。つまり根が問題なのではなく、むしろ移住状況 (*situation migratoire*) そのものの根なしとしての性格が、コードの外に置かれてある状況の謂として折出してくる。例えば自らの身心症状も、他者のコードであるフランス語を介してしか表明できない。移住者とは一種ネガティブなアイデンティティとしてしか把握できず、またイスラーム性は、他への依存性というハンディキャップとして意識にのぼってくる他ない。

この依存対供給の関係は、被植民対植民の関係の転移であるばかりか、医療行為における、看られるものと看るものの関係へも転移

される。この時もはや医者之眼は癒すものとしての一方的優位に立つことはできない。医師の役割分担それ自身が精神障害発生の状況に組み入れられ、ないしそれを反復する形で病の構図に内属しているからである。

視点をここまでずらして見る時、そもそも移住性そのものの具現であるディアスポラを生きる、さまざまユダヤ人が精神分析の生みの親となったのも、けつて偶然ではなかったことが悟られるはずである。アラブにおける精神分析とは、ヨーロッパやアルゼンチンにおけるそれにも増して、そして何より、アラブとヨーロッパの交叉する地点において、異文化間の整流子たる役割をおのが傷として担うべく歴史的文化的に選び定められていたといつて過言でない。ここで傷とはユダヤ性の内に秘められてある絶対的な他者性<sup>アルターナリティー</sup>の謂であつて、その非属・性非・属性こそが、文化間の媒介をとりもつ負の項となる。移民の精神分析とは、だから医師に対して一種同義反復的な自己分析の場の設定を強いる営みである。

\*

ベルナルダン・ドゥ・サン・ヒエールから、ユーゴーを介してミシュル・トゥルニエに至るまで自己省察の場として島が選ばれてきたのも、従つてたんなる比喩にとどまらない。島こそは、純粹な「その島らしさ」などどこにも見いだせぬ混合そのもののみその島の個性を宿す、矛盾の具現であり、さればこそ、そこを訪う異邦人はいつしか自らの帰属意識から自由になった己が身を見いだして少なからず驚愕する。

四日目、七月十六日は「地中海の島々、総合と間文化性<sup>インテリカルナチュラリティ</sup>の場」と題して五つの報告があつたが、その中でチュニジアの作家「Trinib

れていくわけである。同分科会を統括してアジザ氏の述べた、島の詩学とも言うべき問題設定を聴くうちに、思いももうけぬ連想が翔いた。ひとつは大江健三郎の文学、いやそれを一例とする昨今の日本の反体制的(?)ユートピア小説群の「島嶼性」である。外来者を受け入れる器としての女性原理の場はその非複帰属性ゆえ文化史の実験室でもあればその記憶収蔵庫でもある。そして今ひとつは濟州島を舞台とした金石範氏の『火山島』である。一種の亡命文学としての他者性の覚悟が、かえって日本語の閉ざされがちの文学世界に外部への風穴をうち、そこに言葉の本来の意味での国際性を付与したこれはすぐれた「島文学」ならではの貢献である。いささか蛇足であるが、けれど瀬戸内海にもまして東シナ海は日本にとって一種の文化的「地中海」だったのではあるまいか。文物の一方的移入ばかり日本人は考えるが、実は「和寇」はちゃんと中国沿岸まで出沒していた文化表象なのだから。

\*

五日目(七月十七日)は「世界におけるアラブ、イスラーム、地中海研究」と銘うって、午前午後計九つの発表が行われた。冒頭、合衆国におけるイスラーム近代文学研究の現状を語った Michael 女史はもとモカイロの人だが、合衆国のアカデミズムに属して「イスラーム文学」をひとつの地域研究として攻究することに、解放されたアラブ女性の自己実現を成就したタイプの闊達な女性。つづいて Ch. Butterworth がアベロエスを中心として、合衆国でのアラビア哲学研究史を仏語で明快に詳述した。彼は最初に、政治、宗教と哲学とを明確に区分しようとするので少々気になったが、そ

氏は、かの『オデュッセイアー』はロートスの島、と見做され、今や皮肉にも故郷なき世界の老人のリゾートの中心地(Centre mondial de géontologie)と化してしまった感のあるジュルパ島の文化史を説いた。地中海交易の北アフリカ側の要であつたこの地で、ユダヤ人金細工師が、イスラーム・ジャンセンストとも称すべきイバディットたちと調和のとれた共存生活を営んできたという史実は、先述の精神分析をめぐる議論の中で浮上してきたユダヤ性の傍証としても興味深い現象であろう。

同セッションでは今ひとつパリの「地中海文明研究国際協会」(International Association for the study of Mediterranean Civilization)の M. Galley 夫人の報告に触れておきたい。地中海地域に広く分布するバラッドのひとつに「マルタの花嫁」と題する、海賊に奪われた花嫁の話がある。マルタの伝承では海賊とはトルコを指すが、チュニジアの伝承では逆にキリスト教徒が海賊となる。連れ去られた先で花嫁は盛装をほどきされ、王妃にして進ぜようと言われるが、これはカトリックからイスラームへ、ないしその逆の回宗、つまり彼女の奉ずる宗教に対する裏切りを含意する。シチリアに伝わる歌詞のように花嫁は身投げをするという悲しい結末もあれば、身の代を払われて無事連れ戻される場合もある。だがこれらの伝承は必ずしも融和なき反目ばかりを哀歌に託して強調するものではない。現にサラディーンこそキリスト教界からも最高の騎士道者と見做され、いくたの愛の物語を生んだのではなかったか。この伝承に通底するのは、結婚を暗喩とした異教徒間の和解ではなかったか。それが現実にも可能であれ不可能であれ、こうしたバラッドこそ地中海文明の生きざまが縮図として形象さ

の理由はつづくチュニジア出身で南フロリダ大学の Hechime 氏がミハイエル女史を補つてサイドとバーナード・ルイスの論争に言及し、合衆国における「中東」研究の政治性に対する内部告発に近い戦闘的言辞を吐き始めたところで、ははあとな得がいった。

座長の B. Selim は、自己の研究者としての体験をもとに、マールシャル・ブランといった政治的決定に乗せられて派遣されたアラビア世界ではじめてアメリカならざる世界に接した驚きと喜びとが、むしろ政治的意図を越えた深い知的体験となり得た時代をなつかしく思い出しながら、翻つて、今や教育省の予算では外国研究予算は獲得できぬ現状の下、黒人アフリカ文学と違つて日蔭物的研究対象にとどまつているアラブ文学研究では、その研究対象を十分に蔽い尽すに足る情報蒐集すらままならぬ苦境を開陳した。産学協同のつとめたブルドーザー式 Ph. D. 産業の意外と知られざる盲点とも言うべきか。

休憩ののち、オックスフォードの F. A. Nizami 氏が南アジアにおけるイスラーム研究の現状報告。黒いイギリス人生産を旨とする植民地時代の教育システムに順応したケンブリッジ帰りのイスラーム研究という一種の自己疎外への挪揄的自己批判もあつたが、語りはじめると自分で設定した制限時間もどこへやらというインド知識人のならい、少々総花的。三日目の、キプロスをフィールドとするケンブリッジの P. S. Cassia 教授のこれた早口の報告ともあいまって、どうもイギリス畑の若手研究者のそつのない距離感とエリートぶりに何となくお困柄が忍ばれた。相対する合衆国勢が全員フランス語使いだつたことも手伝つてか、フランス的知性(↑)の感じられぬ発表について行けなくなつている自分に気付いて少々啞然とし

た。今に至ってもイギリスのオリエンタリズムはフランスのそれとどこか本質的な前学問的レベルで違っている様子なのである。

つづいて座長の小堀巖明治大学教授が、日本で最近とみに進捗著しいイスラーム学、アラブ研究と地中海学会等について、ザッハリッヒビだけにかえていささか自画自賛気味との印象を得る報告（英・仏語混用）。政治性のない戦後日本の中東研究にかえて自の政治性の負い目のようなものを感じたのは小生のひねくれであるうか。とまれほとんど全ての発表に対して、ドイツ語、アラビア語、スペイン語まで交えて質問を投ずる小堀教授の広汎かつ深い学識と若々しく精力的な参加態度は、一同に大きな存在感を印象づけた。

これにつづいて、宮治美江子教授による日本女性研究者の成果報告（英語）と自己のマグレブとパリでの移民を中心とする比較社会調査に基づいた所感（仏語）。欧米の学会、さらに現地社会に対してそれがいかなる貢献たり得ているのかとの自問。また、客観的成果としての論文にもまして、むしろ一家の主婦として異なる生活圏の家庭生活に接する体験を、調査者と被調査者との差に安住するのではなくむしろその絶えざる葛藤そのものを生きた次元に尊さを見いだす視点からとらえようとする態度は、参加者の共感をさそった。もつとも、かくまで女性進出が盛んとは、むしろアラブ研究が日本の学会では軽視されていることの傍証なのではないか、といったうがった質問が、マルタの土地法について国家博士号まで取ったアラビア語教授資格所有者のいさましいフランス女性から提出されたことも記しておかねば片手落ちかもしれない。

昼食は小生、この女傑、Marie-Christine Delacambre博士とたいへんな舌戦をやらかして溜飲を下した思いであったが、午後

出したが、ソビエト側は、政治と科学の混同はもう時代遅れで解決済み、とやんわりやり返した。

ここには二超大国間の代理戦争というより、むしろ逆にアラブ圏、イスラム教国側の利益代表者が、その矛盾する利害の後ろ盾をそれぞれ両陣営に頼んでいる、といった一種倒立した事態が垣間見られる。小生としては、個人の意思と国家の意思とが互いに入れ子となって循環論法に陥るまま、個人々の良心がついに裏切られる他ない逆説に、国際関係というものがまとわずには居ない「痛み」の原点を見る思いがした。

とまれこの一件ではアメリカ合衆国よりの参加者内部で甲論乙駁かまびすしき有様で、一座をまとめるべくアジザ氏は、エドワード・サイードが旧来のオリエンタリストの政治的下心なり、その無意識・無前提の植民地主義的イデオロギーなりを糾弾するにのめりこむあまり、学問の場そのものを政争の場にひき戻してしまった点を遺憾とし、むしろヨーロッパの側のオリエンタリズムに見合う水準で、アラブ側のオキシデンタリズムを設定できずに居る現状こそ脱却されるべきであり、交叉せる読解（lecture croisée）の現場という相互流通の場を設ける知的努力が依然として不足している旨、指摘した。これは彼の提唱するユーロ・アラブ大学の基本構想であるとともに、「東洋」「西洋」というそれ自体相互誤解の産物が生まずには居ないすれ違いと誤解のすき間にこそ文化交流の可能性を認めようとする点で、小生なりガレー女史のアプローチへの参同が学会組織者からもはからずも得られた次第、少々面映くなくもなかった。

考えてもみれば、西欧研究者たるアラブ人が、アラブ文化の利益

は同席のP. Valsa氏が、つい昨日とうとうフランス中等教育教授資格試験から、予算の都合とかで、ポルトガル語、ロシア語、ヘブライ語とあわせてアラビア語も削る旨の閣議決定が下されてしまったことを話の枕とする、フランスでのイスラーム、アラブ研究の現状と未来を憂慮して止まぬ報告。今やイスラームがカトリックにつづくフランス第二の宗教人口を形成する中で下されたこのいかにもフランス的無配慮の官僚主義的決定を憂うる同氏の談話には、しよせん個々の篤志者の自己献身といささか身勝手なほどの思い入れをなくしては、何らまともな文化行政の立ち行かぬ自国の文化政策に対する、一種の澄んだ達観と諦念とが伺われ、いやましに氏の内なるむなしさを伝えて止まなかった。

\*

これに先だって、ソ連からの代表、モスクワ東洋研究所のV. N. Kirpichenko 夫人、科学アカデミーのV. E. Chaqai 氏がともにアラビア語でみごとな報告。もつともどちらもロシア流の大演説で同時通訳も気圧され気味、参加者中恥しながらアラビア語を三語と解さぬ小生には内容を詳にすることはでき兼ねた。

イスラーム文化が抑圧と搾取の対象となり、その十全な文化的可能性を發揮していない現状に義憤を隠さぬシャガール氏の熱情と使命感に対しては、しかしむしろそうした姿勢が、アラビア文化復興の名の下に、ソビエト帝国主義のイスラーム教圏への浸透を正当化する隠れ蓑としての装われたイデオロギーとなっているのではないかと、とする、これはこれだけでも、「アメリカ帝国主義」流のイデオロギーそのままの質問が、他でもないミハイエル女史の口から、司会の制止もなんのその、まことに雄弁なアラビア語で滔々と流れ

代表として敵地へ乗り込み、植民地主義的オリエンタ学を批判するというのは、一見華々しいもののは、イスラーム教徒の一人人がアメリカ合衆国のイデオロギーを代弁することでイスラーム学徒として国際的知名度を得、そうした自らの姿を誇りとこそせよそこに何ら疑問を抱かず、逆に合衆国を自らの攻撃基地として母国ないし共産国の学問を批判するというのと、まるで表裏一体ではなからうか。しよせん出合いはイソップの鶴と狐の食卓の如きすれ違いなのだが、あとは相手の料理を拒絶して自分のものを押しつけるか、それとも相手の料理が食べられるように自己改造するかの差である。そもそも先方の料理のねたは自国産だと意地を張るから話が権益がらみでややこしくなるだけのこと。と、そう見切ってしまうえば、オリエンタリズム論争を通じて明らかにするのは、むしろ西欧インテリならびに西欧化されたアラブ・インテリの自己に対するおどろくべき信頼（およびその強迫観念）ではなからうか。

言葉を奪われてきた自らの存在の正当性を、乗っ取りを通じてであれ、拒絶を通じてであれ、西欧の学界の内主張せざるばあらずという状況そのものがいかに片務的な事態であり、その二重の欧米中心主義の中では、獅子身中の虫たらんと意図がすぐにも虎の威を借る狐と化す危険のあることに、サイードほどの知識人すら無神経で居られる、ないし無神経を装うところまで追いつめられてしまっている事態に何とも釈然としない印象を抱くのは、しよせん第三者でしかない極東人のひがみというものだろうか。フランス語圏の人々の反応に接し得なかったのが残念であるが、かえて世界に全く通用しない学界を温存している日本人の日本研究者が世界の学問動向に一喜一憂している有様の方がよほど健全ではないかとさえ思

われた。けだし多様性が減少するとともに誤解は質・量ともに増加するものらしい。内心いささか撫然たらざるを得ぬ所以である。

\*

翌土曜日は論敵も英仏対立も欧米対アラブもご破算にして、ゴゾ島へ大挙遠足（ソ連からの参加者の顔の見えなかつたのが残念である）。ゴゾはマルタ本島の北に位置する、まことに風光明媚の土地で『オデュッセイアー』のイタカのモデルではないかと言われるラムラ湾を擁した小島である。イマナルヤの収穫祭といった数年来政治的理由（19）で禁止されている興味深い民俗から、学者先生たちご一行のてんやわんやの珍道中、知られざるクレンデイ湾の磯浜での水浴に至るまで、詳細をルポルタージュしていささか読者の文学趣味にお答えしたいところであるが、もはや紙面が許すまい。とまれ百聞は一見にしかず。そもそもマルタが地中海のどのあたりにあるものかご確認の上、この文学交渉、文化交流の一点を識らずしては地中海を語り得ぬ次第をいささかなりともご理解願いたい、と大言壮語して、責任のがれの尻ぬぐいにかえさせていただく次第である。

（パリ 一九八七年七月二十四日）

【編集後記】 たくさんの人にたくさんの迷惑。雪は降るし、梅は咲くし、桜は散るしで、さんざんのご迷惑。どうしてこういうことになってしまったのか自分でも筋道をたてて説明することはできないが、『メリメロ』の第7号が予定を激しく蹂躪しつつようやく日の目を見ることになった。万歳、漫才、終わりよければすべてよし。

エル・サルバドルは本当にすてきな国だった。気候は最高だし、人間は愛しい。すでに八年間も同じ国民同士で殺しあいやってきた国とはとても思えないほど、エル・サルバドルの人たちは優しくかった。どういうことなのか、今だによく理解できない。第一、四国くらいの大さきの国で八年間も戦争をやって決着がつかないというのは、どういうことなのか。やはり誰か戦争をすることで儲けている人がいるということなのだろうか。

パナマ、ノリエガ將軍は悪人の顔をしているが、人間、顔で判断しちゃいけない。アメリカ合衆国にはラテン・アメリカを理解することは絶対にできない。情報をいくらもっていても、理解できるかどうかとはまったく関係がないことのよい例だ。承認するしないを表明しなければならぬような事態は発生していない、という、日本政府おきまりの形式主義的な立場表明がかえってすがすがしく響いた時だった。そう、パナマ人以外誰もどうこう指図しちゃいけないんだ。グレーム・グリーンは何を思っているだろうか。

まったく

ラテン・アメリカは

すごい。

『メリメロ』にいつ夏が訪れるか、それは蛙たちと一緒に考えよう。

とりあえず。管啓次郎がアルバカーキに望むものを見出ださんことを。フランス国立図書館が港千尋の作品を購入して世界に範を示さんことを。中森明菜が寺西潔の曲を歌わんことを。赤間啓之が行方不明からこの世へと戻って来んことを。 且 敬介

#### 【オフィス・エキノクシアルからの広告】

赤間啓之の『ラカンもしくは小説の視線』が弘文堂から世界に光をもたらしたのは周知のところだろうが、今福龍太／且敬介／管啓次郎の共著『ブラジル宣言』がやはり弘文堂より六月に刊行される。以下続々と「コレクション・ブラジル」が世界のブラジリゼーションを進めてゆくはずだ。

バルガス＝リョサ『世界終末戦争』は且敬介訳で新潮社より88年夏刊行予定。セベロ・サルドゥイ『バロッコ』も且敬介訳で筑摩書房より六月に刊行される。

期待は失望の母、とは大龍詠一の名言だが、希望の母であることも忘れないようにしましょう。

#### 【七月堂からの広告】

アンプ製作します。真空管とトランジスターを組み合わせた画期的なものです。

全て優秀パーツ使用でしかも超コストパフォーマンス。いかなるスピーカーも完全に制御します。まずは試聴してみてください。 七月堂の木村まで。

**MÉLI-MÉLO 第7号** ●1988年5月1日発行

●編集＝赤間啓之＋管啓次郎＋且敬介＋港千尋

●発行人＝森名明子 ●発行所＝オフィス・エキノクシアル

〒154 東京都世田谷区梅丘 1-24-2 ●製作・発売＝七月堂 03(426)5972

●定価 500 円 ●郵便振替 東京 7-80691 七月堂

●次号は11月1日発行。